

かぶり厚さ

a.かぶり厚さは、特記または設計図による。特記および設計図に示されていない場合は、表9.1に示す値とする。

表9.1 かぶり厚さ

部 位		かぶり厚さ (mm)
土に接しない部分	屋根スラブ 床スラブ 非耐力壁	屋内 30 屋外 40 ⁽¹⁾
	柱 耐力壁	屋内 40 屋外 50 ⁽²⁾
		擁壁
	土に接する部分	柱・はり床スラブ・耐力壁 50 基礎・擁壁 70

[注] (1) 耐久性上有効な仕上げのある場合、係員の承認を受けて30mmとすることができる。
 (2) 耐久性上有効な仕上げのある場合、係員の承認を受けて40mmとすることができる。
 (3) コンクリートの品質および施工方法に応じ、係員の承認を受けて40mmとすることができる。
 以上とする。

b.施工者は、工事に先立ち、設計図および鉄筋工事の施工図を検討し、上記a項による所定のかぶり厚さが確保できることを確認する。所定のかぶり厚さが確保できない箇所がある場合は、係員の指示による。

海水の作用を受けるコンクリート

a.海水に接するコンクリートおよび海岸地域で波しぶきを受けるコンクリートに適用する。適用箇所は、特記による。
 b.海水作用の区分は、表22.1による。

表22.1 適用箇所の区分

海水作用区分	適用箇所
A	潮の干満および常時波しぶきを受ける部分
B	常時海中にある部分
C	時おり波しぶきを受ける部分

c.海水作用区分“C”のコンクリート面には、塩分の浸透を抑制する仕上げを施す。
 d.施工者は、工事開始前に、海水の作用を受けるコンクリート工事に用いる材料、調合、打込み、養生などの方法を定めて、係員の承認を受ける。

かぶり厚さは、表22.3に示す値以上とする。

表22.3 かぶり厚さ

海水作用区分	防せい処理鉄筋を用いる場合	普通鉄筋を用いる場合
A	(表9.1の値) + 20	90
B	(表9.1の値) + 10	80
C	表9.1の値	70

鉄筋の組立て

a.鉄筋は、施工図に基づき所定の位置に正しく配筋し、コンクリートの打込み完了まで移動しないよう堅固に組み立てる。
 b.鉄筋は互いに堅固に堅結する。
 c.バーサポートおよびスペーサーなどの材質および配置などは、特記による。特記のない場合は、表10.4を標準とする。

d.鉄筋相互のあきは、粗骨材の最大寸法の1.25倍以上かつ25mm以上、また丸鋼では径、異形鉄筋では呼び名の数値の1.5倍以上とする。
 ここで鉄筋相互のあきとは、平行して並ぶ鉄筋の表面間の最短距離であり、異形鉄筋の場合は、相互の鉄筋のふし・リブなどが最も近接して、不利に並ぶ場合の寸法とする。
 e.はり貫通孔ならびに壁およびスラブの開口部の補強筋は、特記による。

表10.4 バーサポートおよびスペーサーなどの種類および数量・配置の標準

部 位	スラブ	は り	柱	基 礎	基礎ばり	壁・地下外壁
種 類	鋼製・コンクリート製	鋼製・コンクリート製	鋼製・コンクリート製	鋼製・コンクリート製	鋼製・コンクリート製	鋼製・コンクリート製
数量または配置	上端筋、下端筋それぞれ1.3個/m ² 程度	間隔は1.5m程度 端部は1.5m以内	上段は第1段の帯筋の位置 中段は柱の中間 柱幅1.0mまで2個 1.0m以上3個	面積 4m ² 程度 8個 16m ² 程度 20個	間隔は1.5m程度 端部は1.5m以内	上段は第1段目の壁筋 中段は上段より1.5m 下 横間隔は1.5m程度 端部は1.5m以内
備 考		側ばり以外のはりは 上または下に設置、側 ばりは側面にも設置			上または下と側面に 設置	

[注] (1) 表の数量または配置は5~6階程度までのRC造を対象としている。
 (2) はり・柱・基礎ばり・壁および地下外壁のスペーサーはプラスチック製でもよい。